

# 地域活性化という「遊び」④

京都市  
福知山市 「みわ・ダツシュ村」から

山本晋也

筆者プロフィール

1968年、京都生まれ。美術大学を卒業して渡米後、京都で現代美術作家として活動。そのかたわらオーガニックレストランを経営するも食材を種から作ってみたいとなり、京都市内で畑を始める。結婚して3人の子供を授かったころ、農業生産法人みわ・ダツシュ村の清水三雄と出会い、福知山市の限界集落に移住。廃屋を修繕しながら家族で自給自足を目指す。土と向き合ううち田畑と山や川、個人とコミュニティーの関係やその重要性に気がつき、田舎も都会もすべて含めた「大きな意味での自給」を強く意識するようになる。この考え方は、美術家時代にドイツの現代美術家ヨゼフボイスのすべての人々が参加して創り上げる社会彫刻という概念に影響を受けた。現在みわ・ダツシュ村副村長。

## 無い無い尽くしのこの村に たくさん転がっていた理想の子育てのヒント

移住してきた時7歳だった長男が今年地元で中学を卒業。  
卒業式の後、教室では生徒がそれぞれ3年間で振り返って思ったことを述べるコーナーがありそこである生徒が言った一言がとても気になりました。  
「三和町は遊ぶところがコンビニくらいしかないので卒業したら



凧の骨に使う竹ヒゴは裏山の竹を切ってきて加工

大阪とか京都で遊んでみたいと思います」  
まあ過疎地特有の疑いようなない事実ですから  
保護者も生徒も大笑いでしたが僕はちよっと考えこんでしまいました。  
確かに都市に行けばお金を払えば子供を楽しく安全に遊ばせてくれる場所はたくさんあります。  
しかし僕にはそれが物足りなかった。  
20代の頃リュック一つ担いでニューヨークのような大都市からアフリカのサバンナまでいろんな国を旅して回った時一つ感じたことがあったのですが

それは「貧しい国の子供達ほど笑顔に元気がある」ということでした。  
壊れた自転車の車輪一つで一日中楽しそうに遊んでいたアフリカの子供たちの  
眩しいほどの笑顔は  
今でも目に焼き付いています。  
もし僕が親になったらこんな笑顔を持った子供に育てたいその時そう強く思ったものです。  
のちに晴れて親となつてまず実行したことは豊かな日本で「無い」ということを



おやつは材料から

人工的に与える努力でした。  
誤解を招く前に言っておきますが今に生きる人間として  
文明が進歩して来たこと  
これからもどんどん進歩し続けることはとても素晴らしく  
自分もそれに参加したいし  
子供も参加してほしいと  
日々思っていますので



インドのタクシー??

親のノスタルジーで子供を古い人間に育てようというのでは決して無いのです。新しいことをしてほしいからこそまずは「原点」を通して置いてやりたいと思うのです。「無い」というところから何かを作っていく」

「退屈だから何か遊びを発明する」「とても面倒だから何とか工夫して楽ができるよう改善する」というような経験を初めにさせたかったのです。だから完成されたおもちゃは与えることをせず材料や最小限の道具を与えるのみ。おやつも、材料を与えて自分たちで作ってもらおうというふうにしました。

そうしているうちに  
もつともつと自然に近い形で

無いということを経験させたくなり  
こんな田舎に移住  
ということになったのです。  
ここには  
お金さえ出せば簡単に買えるお店が  
無い代わりに畑や山や川があり  
おもちゃの材料もおやつ材料も  
やろうと思えば  
自分たちで調達できます。  
もつと進めば新しい道具だって  
作れるかもしれない。  
そう  
「無ければ買ってくる」  
「めんどくさいからやめる」  
「無ければ作っちゃえ」  
「めんどくさいからやめろ」  
という  
日常的にクリエイティブなことを  
楽しめる精神を  
最初に持つて欲しかった。  
最初にそこを通っていけば  
大人になっても  
遊ぶところが無いからお金使って外  
に遊びに行くという感覚では無く  
遊ぶところが無けりゃ自分たちで  
何か面白いもの作っちゃえ  
という発想が自然に生まれると思う  
のです。  
無い無い尽くしのこの村に  
僕が探していた理想の子育てのヒ  
トがたくさん転がっていました。



遊びに少々な怪我は付き物。キズは笑って治す！



竹で作る刀の反りには相当なこだわりが……



パンケーキを焼く火も自分でおこします